創作

給料日

三川　志本　太

暗い坑道を坑夫たちの安全灯の灯が揺れながら縫いた。長い、退屈な坑道であつた。

その長い坑道も、朝、入坑する時にはそれ程長いとも退屈だとも感じなかつた。だが昇坑する時には非常に長く、退屈に感じられたまたその坑道が今日ほど長く感じられたことはなかつた。坑夫たちはそれぞれ想像し、期待して胸をふくらましていた。それがよけいにこの坑道を長く感じさせ、いらいらさせていた。それは、入坑してからまる二日間も坑内にいたような気ぜわしい気持になつていた。

今日は、坑夫たちの祭日とも云うべき日である。吉田は、先月の出勤日数や歩増などからある額について考えていた。まさかそれよりすくないことはないだろうと考えながら歩いていた。むしろそれより多い方の時のことを考えていた。そう考え始めると、変にそのことが実現しそうに思われ独りでにやにやしていた。彼は人車乗場まで着くと腰を下した。ここまで来ると今までの焦燥感はなくなつた。それは、天盤の低い切羽で、押しつけられたような気持で働いた――一日の仕事から解放された喜びであつた。とくに、今日は、帰つてからのぼく然とした喜びがまつていた。たくさんの坑夫たちが、がやがや話しながら人車を待つていた。

「おい、吉田！えらくにやにやしとるが、よつぽど多かつぢやろう」

鼻の頭の赤いヒゲ面の男が話しかけて来た。

「いや、たいしたことはなかろう」

吉田は自分の考えていたことは反対のことをいつた。だが、自分の考えている額より多いような気持が、よけいはつきりした形をしてあらわれたように感えた。

「先月は何日でとるかい？」

「二十七日だよ」

「ほう、出たなあ！まあこれ位は間違いなかぱい」

と赤鼻は両手の繼に油のしみこんだ指をひろげて見せた。

「そんなにあるぢやろうか」

吉田は内心自分の満足をかくしきれず思わずにつこりした。それは自分が考えていた額よりさらに多かつた。吉田は二十七日も出たのははじめてであつた。それに家族が多く生活は楽ではなかつた。年老いた両親と妻、それに子供が三人もあつた。彼はまだ若く三十そこそこであつた。

「だが本給が安かけん、いくら出てもあんたにはかなわんぱい。あんたは本給は幾らな？」

吉田はいかにもばからしいというような表情をした。

「三百八十円七十二銭たい。しかしもう三十年近く出るけんな。坑内ぢや高い方かも知れんが、他の会社の者にくらべたら安いもんぱい」と赤鼻の男は弁解するようにいつた。

「俺と百円近くも違うたい……」

と吉田がぐちつているうちに人車が下つて来た。皆んな一番上の人車に乗ろうと上の方えかけていつた。吉田はやつと上から三番目の人車に乗つた。上に乗りそこなつた坑夫たちがぞろぞろと下の方え歩いていた。

「天気はどうだつたかい？」

と誰かが笑いながらいつた。上の人車に乗つた者がどつと笑つた坑夫たちはいつも二番方の坑夫たちに会うと天気を尋ねるのが挨拶になつていた。

「雨が降つているぱい！」

といいながらぞろぞろと下の人車に乗りこんだ。人車は皆んなの笑いを残して動き出した。人車のことことという震動も快よく感じられた。吉田はさつきからある一つの計画について考えていた。いままで給料を受けるとみんな妻の佳代に渡していた。だから妻から貰う小使は、家計が苦しいという理由で、煙草銭を引くといくらも残らなかつた。それで友だちとの酒のつき合も少なかつた。ほかの同僚たちは、吉田が金をためているのだろうと噂していた。そんな陰口を聞くと、彼は無性に腹だたしく感じた。一月分の給料を全部でも使つて見せてやりたい衝動にかられた。

だがいくらか冷静になると、自分の考えがばからしくなつてくるのだつた。

人車が坑口に着くと、坑夫たちは一つの流れとなつて坑口にかけのぼつていつた。坑口の屋根から洩れてくる光りが太い縞模様に斜めに射しこんでいた。

M坑の門の前に講堂があつた。その講堂が金渡し場になつていた。両側の窓には金アミが張られて両側に窓口があつた。吉田がいつも受取る窓口は西側の窓口であつた。吉田がいつた時五、六人の人が列んでいた。吉田のすぐ前には二、三人の女が居た。その中の一人は髪は白くなりかかつていた。もう六十過ぎに見えた。手の指は節くれて、それになめし皮がまきついているようであつた。その手に印鑑身分証明と通帳が握られていた。

「谷本さん、そんなお年で大へんですね。息子さんに受けさせたらいいのに」

老婆の前にいた若い女が云つた。

「いいえ、とんでもなかこつですよ。あれに金受けさせたなら、半分も持つて帰らんとですぱい。あー、ほんなこて、とんでもなかですよ！」

と老婆はびつくりしたように骨だけになつた。うちわのような手を振つていた。

「お婆ちゃんも苦労なさいますね」

もう一人の女がさも同情するように、なん度も頭をふりながら云つた。

「息子さんは幾才ですか？」

「もう二十九にもなつて、まだ一人で道楽しとつとですぱい。ほんとうに恥しい話で……、ぱつてん息子も可哀そうな奴ですよ。あれが小さい時に親爺が死んで、私一人で働いただけぢや何一つしてやれなかつたけんですね……」

老婆は涙声をつまらせながら話していた。

「ほんとにねえ」

「早く嫁さんを貰つてやりなさいよ」

老婆のすぐ前の女が云つた。

「えー、そげんな思つとるぱつてん……」

と老婆が話しているうちに前の二人の女は金受をすまして、中を調べていた。

「谷本さん、谷本！」

金アミの中の男が何度も呼んだ

「は、はい――どうもありがとうございました」

老婆は金を受取ると、給料袋を抱込むようにして窓口から離れた。そして袋から一枚々々出して、なめるようにして調べた。吉田はそれを見ていると自分の計画を実行するのをやめようかと思つた。だが給料を受けて見て今考えた事など吹きとんでしまつた。自分が想像していたより多かつた。

講堂のすぐ西に、組合の支部があつた。吉田はゆつくりその中え入つていつた。なかにはあつちこつちかたまつて話しこんでいた。

吉田が入つて来たことに気ずいた者はなかつた。彼はしばらく部屋のなかを一わたり見わたし、二階へ上つていつた。二階へ上ると彼はポケツトから給料袋をとり出した。それからどおしたもんかとしばらく考えこんだ。

袋を貰つてくれば一番はやいのだが、現在ではなかなか手にいらないのだ。しばらくして彼は降りていつた。そして消ゴムを借りてすぐまた上つて来た。彼は、給料袋の金額をしづかに消しはじめただい分長い時間をかけてやつと消してしまつた。消し跡を万年筆の軸でしづかにこすつた。彼は袋から千円抜き取ると、袋に残りの金額を書きこんだ。うまくいつた。彼はほつとした表情で降りていつた。

吉田は途中で子供に絵本とオルゴールメリーを買つた。彼は引抜いた金で払おうとしたが「だがまてよ」としばらく考えた。そしてその代金は袋から端数の百円札を出して払つた。

彼は黙つて袋を妻に渡した。佳代は「有難うございました」と云つて受けとつた。彼女は調べていたが

「あなた！」

と呼んだ。彼は、ばれたかと思つてハツとした。

「え百円足りませんよ」

「絵本とオモチヤの代金を払つたからね」

と彼はほつとした。彼は流れる汗を拭きながら食膳に着いた。お膳の上にはビールが一本乗つていた。

「あなた、暑かつたでしよう」

と佳代はいいながらビールをついだ。彼はキユーツと一息にのみほした。身体中の汗がすーつと引きこみ、軽い酔がかけ廻つた。

「ビールはもつたいなか、俺は焼酎の方がよかぱい」といいながら父は眼をほそめていた。側で佳代はにこにこしながら父を見つめていた。そんな佳代を見ていると、吉田は気持が軽くなつた。その時の彼の気持は無味乾燥で、ビールの味だけがほろ苦かつた。彼はポケツトの中で紙幣を握りしめていた。

【評】　てらいが全く感じられぬ実感がこもつている。貧しさの中に、ほのぼのとした明るさとユーモアが深い、最近の佳篇。

―映画―

砂川の悲劇をえぐる
爆音と大地

監督…関川秀雄　脚本…八住利雄　（白黒）

ベテラン八住利雄の脚色によつて「きけわだつみの声」などでリアリズム作家として不動の地位をしめる関川秀雄監督が、精魂をかたむけてメガホンをとる注目の野心作である。土地に執着する農民のいきどおり、それに職務と日本人としての感情の板ばさみになつた調達庁長官の苦悩を描いている。「独立国に外国の軍隊がいる」日本の悲劇を、セミドキユメンタルにまとめ、記録映画「砂川」におとらぬ感動深いものにしている。新任長官の浮島は、地元民とできるだけ衝突をさけるべく、庁内、とくに東京長官矢田（加藤嘉）らの強行策に反対して話合いによる解決策にもつて行こうとする。しかし、地元民の固い決意の前には強制測量もやむを得ないと決行する。

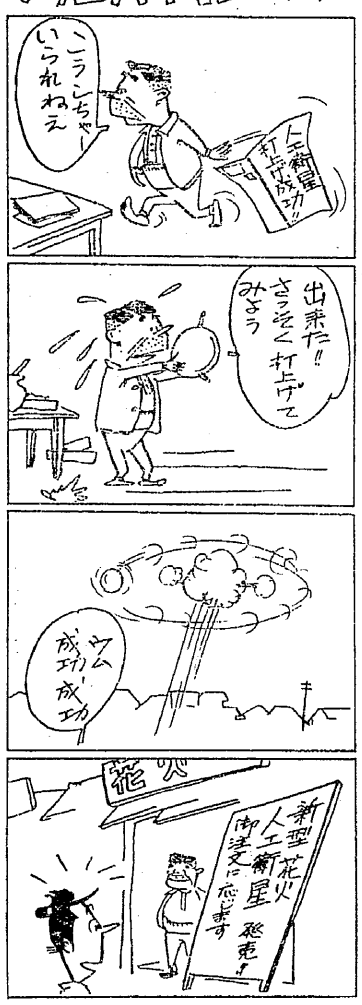
これに対し女子大生で姪の圭子は叔父の態度を非難して家出する。また、元浮島家の女中で現在は砂川に嫁ぎ、父助造の激しい土地への執着心に影響を受けた政代も、義理とは別なものだと割りきり、反対闘争に立上る。しかし、地元民のあいだにも強硬派と条件派の冷たい反目があつた。

闘争派の指導者である高崎町長の娘ヨシは駐留軍労務者の夫とともに条件派に属し、夜逃げ同様町を去つて行く。浮島はアメリカの為に、日本人同志が血を流すのに耐えられず職をしりぞく。そして砂川には遂に悲劇の日がくる。

おびただしい負傷者の中には圭子もまじつていた。圭子を引取りに砂川を訪れ、傷ついてなお土地を守る農民や学生や労組員をみて、そこに彼ははじめて希望をみいだす。この基地拡張の問題は、政府と地元民との間での歩みよりは、なかなか困難であり、その主張は平行線をたどることであろう。ともあれ、われわれは、この日本の現実を直視することが何よりも大切だとおもう。

（十五日より東映にて）

長屋大百記　中村かめお



囲碁教室 (28)

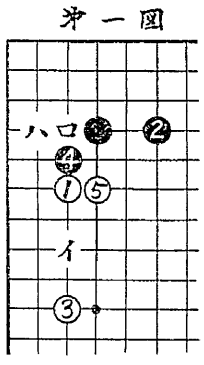
ヒラキ　4

二立三析その他のヒラキの原則も、これを手順を変えて逆に考えると、その意味がよく理解されると思います。

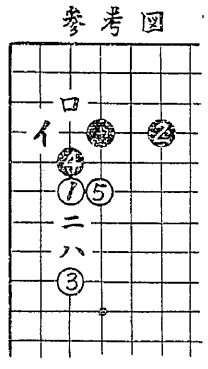
第一図、白1と力力つて黒2と受けた時に、白は3または一路高く星に三間にヒラキます。これは通則に反するようですが後の打ち方を考慮してのことです。白3で参考図のように通則通りに二間にヒラけば、黒は4とすかさずコスミツケて、白からイに走られるのを防ぐと共に白5と立たせて3の一子を重複形に導きます。即ち手順を変えると1、5の二立した石から3と続く二間にヒラいた形で、結果として原則に反することになります。それで白が1から3に二間ビラキしようと思えば、3では先づイに走つて黒ロと受けたとき3とヒラきます。但し、白イに対し黒ロと受けるとは限りません。手抜して他に向うか又はハ、ニの方面から反撃してくるかもしれません。そのときは白ロと打つて隅に生きることになります。

第一図にもどつて、白1、3と三間ビラキした意味を述べましよう。次に黒4なら白5と立つて二立三析の好形となつて、イの打ち込みが解消します。従つて黒4は賢明な策ではありません。黒4でイに打ち込めば白は1の一子を捨てて隅の三々に入つて振替るのが一番わかり易い打ち方です。黒4では先づロまたはハに隅を守つて、白の一方の道を塞ぎ然る後イの打ち込みを狙うのが落着いた好手です。

第一図



参考図



橋口　初義
境　敬一

勝立句会

宮浦鉱木いちご勝立俳句会は九月二十四日午後七時より、雑詠持寄句会を開催した。当夜の主な入選句は次の通りであつた。

太田　白狼

水筒に新茶を入れて入坑す
ひぐらしや山の宿乞う老夫婦
角　たかし

待宵やしづかに流の花芒
縁柱背に満月をひとり見る
中川　き丈

二十年すみし社宅に月のぼる
名月の窓あけ放つくりや妻
加藤　香月

アパートの影かぶさりし秋桜
母に手をひかれゆく子や猫じやらし
太田とくえ

テレビーをみて温泉宿の籐椅子に
山の駅下りて一筋花野径
高むく竜生

生きかへる夕べがありぬほう仙花
秋晴や晩の中より蔦の笛
猪本　柳江

柳川の汲水場々々の溶け障子
水車踏む波に真こもの花ゆるる
中園　凡童

無月なることを悲しみ合ひにけり
朝露にぬれたるナスを貰ひけり

文学座公演

演し物は鹿鳴館

文学座では来る十九日大牟田市民会館で昼夜二回公演を行う。演しものは「鹿鳴館」＝悲劇四幕三島由紀夫作。

恋、政治、母性愛、陰謀、ピストル、殺人、大舞踏会…攻明開化の鹿鳴館を中心にして愛情の葛藤とその後に来る反動時代への予感を浮彫りにした三島由紀夫会心の傑作。筋立はすべてメロドラマ、文体は逆に高踏的、新しい角度からとらえた青年日本の演じた悲喜劇を描いている。